

連載

ニワトリの獣医師と呼ばれて 8

～一懸命から一生懸命へ～



白田 一敏

プロイラー出荷のアルバイト

「白田くん、割の良いアルバイトがあるのだけど……!!」

農学部で、筆者と親しい女性の先輩(A嬢)としておきましよう)に呼び止められた。

「何ですか? そのアルバイトって」と少々緊張して返答する筆者に對して、ニコニコして答えるA嬢。

「プロイラーの出荷を手伝う仕事なのよ」

以前本編で紹介したが、筆者が通った大学の獣医学科の学生は一学年三〇人。獣医学科の教育期間は六年間であるので、合計一八〇人の所帯となる。もともと、実際のところは、専門過程に入ってからが本格的な上下の付き合いとなるために、実質的には一〇〇人強の所帯だ。

こんな小さな所帯なので、学生の出身地、趣味、性格、あるいは誰と誰が交際しているかといったプライベート情報を詳細に把握している名物教授がいたぐらいである。こういったプライベートな情報も、様々なルートを通じて学科内で共有されることもしばしばとなる。

アルバイトで生活費や授業料を稼がなくてはならない貧乏学生で、かつ養鶏場出身という筆者の事情もあまねく知れ渡り、先輩方がプロイラー出荷のアルバイトを頼むに最適な人材と筆者が評価されたのである。

過日のニワトリのワクチン接種実習において、『目にも止まらぬ速さでニワトリを扱ったぞ』といった噂が上がれば、スカウトされるのは当然の結果ともいえる。先輩方は、念には念を入れて、筆者と親しかったA嬢がアルバイトの勧誘役として抜擢されたのだった。

「ところで、バイト代はいくらですか?」

筆者にとっては一番大事なポイントを確認する。

「いいわよ。二時間で五〇〇〇円!!」

「そりゃいいですねエ! いつですか?」

「来週の月曜日から毎日、朝の三時に集合よ」

微笑みながらA嬢は答える。

「講義がありますよ!」

「仕事は朝の六時までには終わるわよ。下宿に戻ってシャワーを浴びても、講義に充分間に合う時間よ」

ニコニコしている先輩を見ると断る言い訳が見つからない。相手がA嬢ではなおさら……。

「でも、朝起きられませんか!」

それでも腰が引ける思いで、言い訳を探す。大して勉強熱心でもなかったのに、本質は結構まじめ人間だったのかな。

「寝なければいいじゃない!! 貴方、麻雀が好きなのですよ。調べはついてるわ。前の晩に麻雀でもしてから行けば遅刻しないわよ」という先輩の顔にはさっきまでの笑顔はない。

「……」

あまりの調査力と強引さに筆者は言葉を失っていた。よく考えてみると、先輩の言う通りでもある。寝なきやいのだ。発想を変えれば、何とかなってしまうものである。二時間で五〇〇〇円も貰えれば、実際に生活は非常に助かる。

「わかりました。やりましょう」

心配の種が除去されれば、筆者にとってニワトリを扱う仕事は得意の分野だ。まして、たった二時間の仕

事である。楽勝だ。

当日、先輩の車に数人で便乗して、アルバイト先である養鶏場に向かった。

「白田君が来てくれたから、凄いい戦力よね」

「まあ、任せて下さい」

筆者の頭の中では家禽実習の時に浴びた注目を思い出していた。

「ところで、ニワトリは何日齢だと言っていましたか？」

「五十日齢ぐらいだったかな」

一緒に作業する先輩方は答える。

「本当に楽勝ですね。片手で一〇羽ぐらい掴めますよ!!」と筆者は得意げに語った。

現場に到着すると、何か違和感がある。同じ養鶏場といっても、農場の様子が採卵養鶏場とは随分異なるのだ。第一、このプロイラー養鶏場では鶏舎の屋根が低い。筆者らが直立することができないのだ。常に屈んだ状態での作業となる。

身長が一七六センチの筆者には、かなり苦痛だった。しかも、やつらは平飼いである。出荷作業時には部屋を真っ暗にするので、それほど素早く動かないものの捕まえようとすると、あちらこちらへと逃げまわる。

さらに次に別の面倒もある。

とにかく重いのだ！何が？体重ですよ。

やつらが五十日齢ぐらいと聞いた時に瞬間に計算した。

「採卵用のヒナでは五十日齢なら六〇〇グラムぐらい。だとすれば、重いとはいってもプロイラーでもその倍(一二〇〇グラム)程度だろう」

しかし、あにはからんや、奴らは三キロにも及ぶ。片手で、一〇羽どころか二羽も掴むと結構な重さなのだ。下手な筋肉トレーニンングよりもキツイ。

さらに悪いことに、コイツらときたら、まん丸なのである。何がって、体型が、ですヨ！

ニワトリが丸っこい体型となっているため、暗闇の中ではどちらが頭か尻か、瞬時に区別できない。決して大げさな話ではない。本当にわからないのだ。僅かの明かりが頼りである仕事では、こうしたストレスが精神的に結構キツイものであった。

おまけに、プロイラー鶏の体は、非常にバランスが悪い。体重に見合うほど、骨格や骨の強度がないのである。採卵用ヒナのように、羽根や脚を持って捕まえると、骨折してし

まうのである。出荷するニワトリに傷をつけてはいけないので、一羽一羽を両手で抱えることになってしまった(これって、どっかで誰かさんがやってたナ。俺はそれを笑ってたっけ)。

こうして、たった二時間だけの作業であったが、終了した時には、筆者はクタクタとなっていた。

作業終了後、農場主に振舞われたお茶をいただきながらしばし懇談した。

このプロイラー農場は、比較的小規模で鶏舎は数鶏舎しかなく、オールイン・オールアウト方式を取っているとのことであった。年に五、六回の導入・出荷を繰り返し、普段は家族労働でほとんどの仕事をこなす。しかし、出荷などの人手がいる

作業の時には、学生アルバイトを雇って運営しているとのことであった。

「学生さんも、随分変わったね〜！昔と今とは」

とは農場主の弁。

「どんな点ですか？」

と筆者は聞いてみた。

「そうだねエ。昔の学生さんは、多少汚れ仕事でも、キツイ仕事でも喜んでやったよ。今は続かない学生さんが多いね〜！」

と答える農場主。

「そうですね!!」

答えながら、現在の学生たちの様子を思い浮かべていた。

筆者が大学に通っていた時は、世の中ではバブルの中期から後期にかけてであった。世の中は景気の良いニュースが流れ、労働力も売り手市場であった。誰も3Kと呼ばれるような仕事には、就こうとしない。そんな風潮が当たり前であった。

頬にキズのある職業の方の家に

大学に入って軌道に乗るまでは、かの養鶏場の社長に金銭的な協力を得たことは以前に触れたが、いつま

筆者の両親が働いていた養鶏場でも、人自体が集まらないことが大きな問題で、良い人材などは夢のまた夢といえた。だから、アルバイトも3Kを伴うような泥臭いアルバイトでは人が集まらないのだ。

先輩たちも学科伝統!?のアルバイトの人集めに必死となり、筆者への勧誘役として親しいA嬢が選ばれた訳である。

プロイラー出荷のアルバイトのすべてを体験して、これまでの経緯にやっと合点がいった筆者であったが、二時間五〇〇〇円のバイト代は大変助かったので、しばらくこのアルバイトを続けた。しかし、早朝にアルバイトをした日は、A嬢が言ったように、筆者は下宿に戻ってシャワーを浴び、講義に出席したところまでは予定通りであったが、講義中は睡魔に勝てず、不覚にも「夢の中」へ行ってしまったのであった。

でも好意に甘えられないので、筆者は生計を立てるために、アルバイトをすることにした。先に紹介したブ

ロイラー出荷は、慣れてしまえば非常に良いアルバイトであった。しかし、人手のいる出荷の仕事は数カ月間に数日といった頻度での仕事となる。すなわち、臨時収入である。

そこで、筆者はアルバイトの定番である家庭教師をして、基本的な生活費を稼ぎ出すことにした。当時の家庭教師で得られることのできるお金は週二回二時間の頻度で教えて、月当たり三万円というのが平均的な相場であった。当時の平均的な大学生の生活費は一〇万円ほどであった。筆者は少なくとも常時三軒の家庭教師先を掛け持ちする必要があった。

ある日の、家庭教師派遣センター本部にて。

「君に行ってもらいたい派遣先があるのだが…」

と幹旋職員。

「承知しました」と筆者は答えた。

「実は、先方から『家庭教師を変更してくれ』とのことなんだ」「私で大丈夫でしょうか?」「君なら大丈夫だ」とは、根拠もない幹旋職員の言。「それと…もう一つ問題があるのだから!!」

「何でしょうか?」

はつきりしない担当者に筆者は少々苛立った。

「実は、頬にキズのある職業の家ののだ」

「えー。つまり、その筋の方…?」

さすがに驚く筆者に対して、まとも根拠もなく、

「君なら大丈夫だ」

幹旋職員は強引に押しつけた。多分、引き受け手がなくて困っていたのかもしれない。

正直一抹の不安を感じたが、親がヤクザでも教える子供はヤクザではないこと、あるいは生計を立てるためには背に腹は変えられないと思いい、この派遣先を受けることにした。

初めて訪問したその「家」は、まさに圧巻であった。大豪邸である。門から玄関まではもう一軒家が建つほどの距離がある。車庫には、黒塗りの大きなメルセデス・ベンツが二台停めてあった。門をくぐり、玄関までビクビク歩きあいさつした。

その家のご主人は、身長一七六センチの筆者が見上げるぐらい背が高く、パンチパーマ、ガラの悪そうなサングラスをしていたので、筆者は正

直かなりビビっていた。勉強を教える男の子もお父さんに似て体格が大きく、中学二年生なのに、筆者よりも体が大きく、柔道をやっているとかで、いかにも腕力がありそうであった。

しばし、歓談しているうちに、かのご主人の曰く、

「これからは、脳ミソが使えなければダメだ」

風貌から、予想もできなかったこの言葉に、筆者は衝撃を感じた。

毎年初夏になると、『長者番付』なるものが国税庁から発表される。

それをみると、消費者金融経営者が上位を占めている。消費者金融とい

えば、サラ金。サラ金といえは、一昔前までは暴力的な取り立て(「ヤクザ」といったイメージがあるのは

筆者だけではないであろう。

もともと、最近では可愛いチワワをコマージュルに出してイメージアップに努め、無人の自動貸付機をあらゆる場所に設置して簡単に借りやすくするなど、良し悪しはともかく、

脳ミソを使った企業努力がなされている。そこにはかつての陰湿なイメージはない。その成果は金融の本家

本元の銀行が見習うほどだ。

この家のご主人がどれくらいノベルで将来を見据えていたのかは知る由もないが、少なくとも彼の言葉に、当時学生だった筆者は感心したものであった。

さて、筆者はこのような経緯で、ヤクザ!?の家の息子を実際に教えることになった。当たり前の話だが、

家庭教師を頼むような家庭は概して裕福である。したがって、中には金

銭感覚が麻痺した子供もいる。この家の息子はその代表例と言えた。例

えば、気に入った漫画や音楽CDを見つけると欲しくなる。こんな時に

そのものを買う単位が半端でない。普通は一冊ずつ購入するものである

う。ところが、この子は全巻を一度に購入するのである。

このような行動に対して、裕福でない家庭で育った筆者は、非常なカルチャーショックを受けた。心の内

側で彼を金持ちのボンボン息子と呼んでいたのは、妬む気持ちからなの

だろう。しかし同時に、彼らが恵まれた環境を良い方向に向けることが

できると、凄いやつを身につける可能性があることも感じ、うすら恐ろしい

気持ちになったものだ。
生活費のすべてを自らのアルバイト

トで稼ぎ出す生活は、苦勞が多いものであったが、筆者には充実感があったし、世間からの評価も心地良いものであった。貧乏学生としての生活に、筆者はいつのまにか酔いしれてしまっていたのだ。しかし、冷静に考えると、家庭教師先の子供たちのように恵まれた境遇を最大限に生かされたら、その境遇がない者たちになかなか勝ち目はないのではないだろうか。

先週日曜日の日経新聞のコラムに、教育現場では子供の基本的な能力差を問題にすることはタブーであり、子供たちは努力すればみんな同じように成績が上がるという建前が暗黙のルールとして存在すると記載されていた。このような暗黙のルールは、何も教育の現場だけに存在する訳ではない。子供たちだけでなく、社会に存在する人々すべてに存在することを、筆者は最近ひしひしと感じる。

各人にとって、何が幸せで何が不幸か、あるいは何が人生の成功かという問題に対して、正しい答えは存在しないように思う。ちなみに、バブル期では、高学歴・高収入というのが人生に成功した基準のような雰

囲気があった。時が移って、最近はこの不況下のせいも、年収三〇〇万円で生き抜く経済学(本の主旨は、世の中で九割以上の人は敗者側に属するのだから、無駄な努力をしないで収入が少ない生活をし、人生の楽しみを見つけようというもの)といった類の本がベストセラーとなっている。これらの提言についての是非はともかく、現在の各人に対する社会評価(報酬)は、本人の能力、努力、境遇、あるいは時の運が総合的に組み合わさってなされることは間違いなさそうだ。

筆者が大学を出て、ピーピーキューシーに奉職して十年が経過した。

この間にお会いした様々な養鶏経営者から、複眼的な視点の重要性など

多くのことを学ぶ機会を得てきた。貧乏学生だったマイナスの境遇が、

この十年間でいつのまにか大きなアドバンテージとなっていることに感謝している。この境遇を生かし、筆者は『業界のハブとして役に立つ』

ことを人生の幸せのひとつとして位置付けたいと思うこの頃である。

(筆者・㈱ピーピーキューシー 品質管理&生産管理部門長/獣医学博士/獣医師)